

越中八尾おわら歌碑 《いにしえの文化人との交流》

今町公民館前(14\26)



呼ぶは胡弓か

物ゆう月か

うれしなつかし

オワラ風の盆

白鳥省吾

白鳥省吾(しろとりせいご)

日本の詩人・文人。明治二十三年、宮城県北部栗原郡築館町の農家に生まれる。中学校から詩を書きはじめ、大学で文壇デビュー。難解な言葉を避け、大地に根ざした「民衆の感情」「現実の生活」を平易な言葉でうたう民衆詩運動をリードし、民衆の内面を描く『民衆派詩人』と称される。代表作に「世界の一人」「耕地を失う日」「殺戮の殿堂」など。

聞名寺前(今町)(15\26)



夢もほのぼの

聞名寺の鐘は

遠い有磯の

オワラ帆にひびく

白鳥省吾



聞名寺石段下 (16/26)



雪の立山

遠くに霞む

八尾坂道

オワラ春の水

川路柳虹

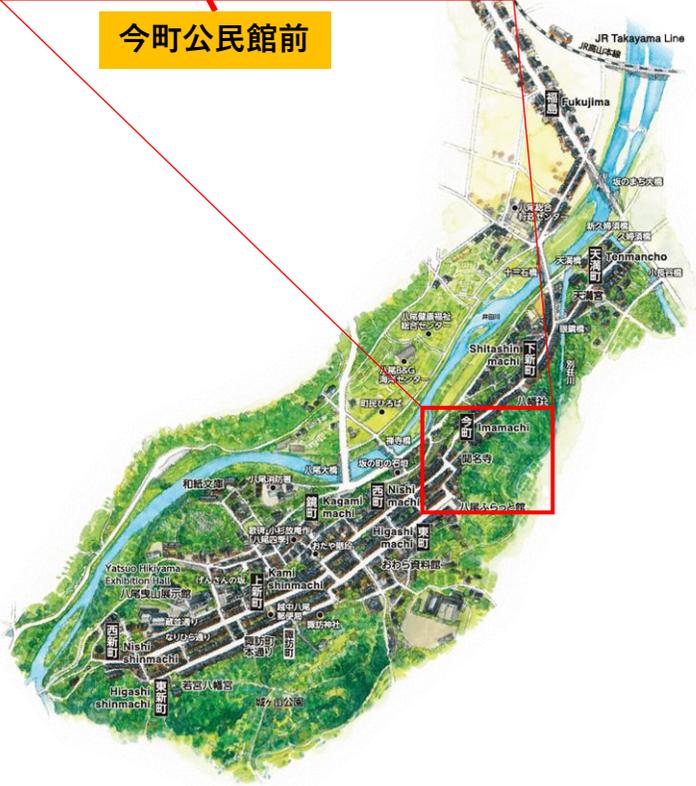
川路柳虹（かわじりゆうこう）
 口語自由詩の先駆者として知られる詩人・美術評論家。本名は誠。明治二十一年、東京府芝区三田に生まれる。曾祖父は幕末の旗本・外国奉行。
 感覚的な表現を重視し、目に見える現実をありのままに描きつつ、内面的な象徴性を盛り込む独特の詩風を確立。東京美術学校（現・東京藝術大学）を卒業しており、美術評論家としても鋭い批評を残している。代表作に「塵溜」「路傍の花」「現代美術の鑑賞」など。

※『浄土真宗本願寺派桐野山聞名寺』 一二九〇年美濃国各務郡平島村に本願寺三世覚如上人の高弟願智坊覚淳が創建。その後飛騨に教線を拡げ、一四六八年五代覚玄が越中に進出、一五五一年現地に於て濃飛越三州の中本山格となる。神保、斎藤、秀吉、前田、金森氏など歴代武將の尊崇厚く、一六三二年に県下最古の寺子屋を開設、境内に東西町など四筋の家並み建設を認め、八尾町の母体となる。

聞名寺石段下



今町公民館前



※人物の説明は主にウィキペディアより抜粋

【補足】八尾の町建てとおわら風の盆



一七〇二年春、藩の役人が加賀藩から下された『町建御墨付』を八尾の町衆が、花見の宴にかこつけて町の遊芸の達人一団を酒肴を持たせて差し向け、町の開祖米屋少兵衛家所
有から取り戻した。その祝いに、三日三晩歌舞音曲無礼講の賑わいで町を練り歩いたのが
始まりとされている。

どんな賑わいもおとがめなしと言うことで、春祭りの三日三晩は三味線、太鼓、尺八な
ど鳴り物も賑々しく、俗謡、浄瑠璃などを唄いながら仮装して練り廻った。これをきつか
けに孟蘭盆会（旧暦七月十五日）も歌舞音曲で練り廻るようになり、やがて立春から数え
て二十十日の風の厄日に風神鎮魂を願う『風の盆』に変化し、九月一日から三日に行うよ
うになったと語り継がれている。

廻り盆の最盛期は明治初年度まで、おわら節をはじめ色々な唄を男女が交互に唄う賑や
かなものであった。

一八二二年秋、町の遊芸の達人たちが八尾独自の里謡が必要と考え、当時の流行り歌の
七・七・七・五調の結句の前に、『おわらひ』という言葉をはさむ『おわらひ節』をつ
くった。

一八四八〜一八五九年の頃に『おわらひ』の『ひ』がとれて『おわら』になったと伝え
られている（八尾史談より）。

明治時代には一時風紀を乱すとして、当局から弾圧をうけたが、
一九二〇年、時の町長橋爪秀太郎、助役渡邊常太郎等の有志が『おわら節研究会』を組織、全国大会にも参加し、民謡として次第に全国に知られるようになった。その頃に金沢から八尾に帰省し十一代目の町医者を開業した『川崎順二』先生がおわら節研究会の理事長となった。

一九二九年春、東京日本橋三越百貨店で開催する余興におわら節の出演が要請され、川崎先生を筆頭にした芸妓十一名など総勢二十数名が三越の舞台に臨んだ。その年の八月、八尾劇場において『越中八尾おわら保存会』設立の運びとなり、川崎先生が初代の会長となった。

川崎順二先生は常に『おわらはプロ化してはいけない、あくまで素人であることに価値がある』と周囲に洩らしており、これが一貫した民謡観として現代に受け継がれている。



▲医学博士 川崎順二 顕彰碑